

井戸掘り事業



2008年11月、第13回カンボジア視察において井戸の確認をして参りました。多くの方々からのご支援を戴き、今回だけでも103本もの井戸を掘ることができました。これによって、これまで掘削した井戸の合計本数が1069本となりました。

今回は、チクレン郡とアンコールチュム郡の4か村にわたって掘削されていました。全部で522世帯、約3500人が利用することになります。水質を心配した会員が、検査キットを準備くださり、

NHK「クローズアップ現代」の報道に関して

視察出発前の11月上旬、「クローズアップ現代」という番組にて、カンボジアでボランティアが掘った井戸からヒ素が検出され、被害者が出ている、との報道がなされました。

当会にも、これまでご寄附くださった方や今後ご寄附を考えてくださっている方、会員から、「SCHECの井戸は大丈夫なのか？」というお問い合わせを多数戴きました。

番組内では地域の特定がなされておらず、あたかもカンボジア全土に掘られたすべての井戸からヒ素が検出されるようにも受け取れる内容だったためと思われます。

今回、井戸を掘った地域のうち6地点において、ヒ素の検査を致しました。結果はいずれも「ヒ素ゼロ」の値を示していました

国際機関の資料によりましてSCHECが活動しているシェムリアップ州は、問題となっている「自然由来」のヒ素検出報告の殆ど無い地域となっているそうです。また地元選出の国会議員に確認したところ、現地でヒ素中毒が疑われる疾患の発症例は無いということでした。

今後もサンプリングによるヒ素検査、水質検査を続けていくとともに、国際機関の情報等も随時確認し、安全な井戸を掘っていきたいと考えております。

祝1000本達成！

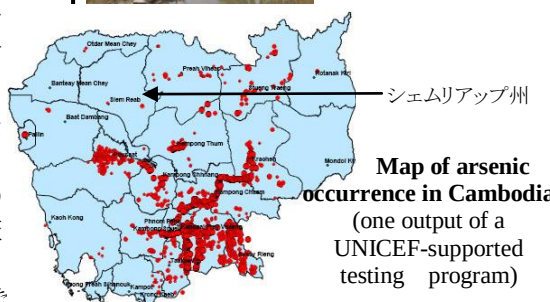
アンモニア値等測定しましたが、問題ありませんでした。

1000本目の井戸は、記念事業ということで1口1000円からのご寄附を広く募り、そのご寄付者皆様の井戸という意味を込め、

「SCHEC CELEBRATE 1000 WELLS」という看板を付して事前発注しておりました。

現地に行ってみますと、その井戸は、井戸掘り体験用となっており、視察団全員で看板を囲んで記念写真を撮った後、井戸掘り体験もしました。

井戸の確認に村々をまわりながらボールペンや手作りノート、折り紙や風船の作品を渡しますと、周辺から大勢の子どもが集まってきます。彼らの純粋な笑顔を見ていると逆に我々がパワーを貰うように感じます。今回は、雨季の降水量が多かったそうで、大きな水溜りやぬかるみがたくさんあり、丸太橋を渡ったり、数人がバイクに跨って進んだり井戸にたどり着くのも大変でした。



SCHEC写真館

朝焼けのアンコールワット



アンコールワットは、西に正門があるため、参道から、朝日を背にくっきりと浮かび上がるそのシルエットを観ることができます。

カンボジアふれあいの旅に参加して

大分県 田崎八男

前年大分の仲間たちで寄贈した中学校を再訪、その学校の生徒達との交流という、一般の観光ツアーでは体験出来ないカンボジアふれあいツアーに大分から9名で参加した。

訪問した「コクトロックルー・サンキム中学校」で、手土産のエコバックと教材を手渡し交流した。歯科グループによる歯科検診も並行して行われた。さらに他の団体や個人が寄付した小中学校の開校式に参列したが、関係者の挨拶では、人口や生徒数の表現として女性数が強調され、歴史的に女性を大事にする国民性を感じた。一方、もうひとつの目的「井戸掘り」視察では、寄付した本人と使用する家族の交流や、千本目の井戸ではシアン・ナム国会議員と参加者全員で記念写真に納まった。こうした小中学校建設や井戸の寄付という善意の行為が、将来に亘りカンボジアの人々のためになり、延いては日本とカンボジアの友好の礎となる事を確信した旅であった。

風光る～～

歯科ボランティアの森岡千代さん。参加3回目のベテラン？で、器具の消毒などできばきとこなす姿は、歯医者さんも唸るほど。SCHECの他にも様々な活動をされており、卒業された短期大学での同窓会、勉強仲間の会合等、機会あるごとに「カンボジアでのボランティア」についてお話してくださっています。2008年12月には、大学のゼミで映像を駆使しながら歯科ボランティア体験の講義をされたそうです。広くボランティア活動への関心という種まきをしてくださっています。

今後のスケジュール（2009年前期）

2月26日：3月視察分井戸締切
3月23日～：現地視察
6月下旬：総会&活動報告会

事務局便り

今回の活動は、参加者92名という大所帯での活動となりました。各チームで事前ミーティングなど準備をし、現地に向かいました。経験を積み重ね、NPO法人として成長してきたことを感じます。参加者に折り紙の先生や手品の名人がいらして、現地の子供達に教えたり、パフォーマンスをしたりしてくださいました。言葉は通じなくても、手や顔の動きで心通わせることができるのは素晴らしいことです。今回は特別に4面構成でお送り致します。（も）

ドムヌン ピー シェック

第11号（2009年1月号）

Domnung Pii SCHEC

～チェックからの便り～



SCHEC

NPO法人 カンボジアの健康及び教育と地域を支援する会
〒160-0004 東京都新宿区四谷4丁目3番29号伸治ビル4階
Tel&Fax 03 (5368) 6387 http://www.schech.org

待望の学び舎開校！

2つの学校から子ども達の
新たなストーリーが始まります

タトイ・サンキム小学校
大宮シティロータリークラブ校舎



写真上：生徒・村民がタトイ・サンキム小学校の校門に並んで我々を歓迎してくれました。写真下：黄色がまぶしい真新しい校舎で遊ぶ生徒たち。

2008年11月21日、シェムリアップの街から西に約60km離れたアンコールチョム郡チュエチューク地区タトイ村のタトイ・サンキム小学校大宮シティロータリークラブ校舎の開校式が執り行われました。

舗装された国道6号線を逸れてから、乾季であればものすごい砂埃が予想される土の道を行ったのですが、今年は、今回の視察の数日前まで雨が降り続いていたそうで、あちらこちらに大きな水溜りがあり、我々が乗った車も轍にタイヤを取られ、空回りしてしまうなど、ぬかるみと戦いながらの行程でした。

この小学校は、在さいたま市の大宮シティロータリークラブのメンバーの皆様がクラブの創立10周年を記念してご寄附くださ



生徒の喜びの声



ナットちゃん（写真左）は、7歳。小学1年生の女の子。

「学校は楽しいです。国語（カンボジア語）の勉強が好きです。将来はお医者さんになりたいです。」

友達と遊ぶことが大好きというチツくん（写真右）は、タトイ小学校が出来たおかげで、9歳で念願の小学1年生になることができました。

「大きくなったら警察官になりたいです。タトイ小学校で、たくさん友達ができました。」とちょっと恥ずかしそうに話してくれました。

大宮シティロータリークラブ会員の佐々木さんより、今回の視察旅行のご感想を戴きました。

「カンボジア視察を振り返って」

佐々木 修

この度、はじめての国際奉仕活動としてSCHECのボランティア活動に参加させていただきました。カンボジアという国をよく知らずにイメージが先に立つ中でシェムリアップ空港に着き、まずは南国特有の雰囲気と空気を感じたわけで、そこから翌日の視察となりました。

街に入ってまず道路事情についておどろきました、交通規則は右側通行だけで車やバイク・自転車などがそれぞれの自己責任（バイクの4人乗り、2重の追い越しなど）の中で交通ルールができていて、それが自然とスムーズに交通規則となっているような感じがして最初に驚きとなって印象に残りました。（次頁へ続く）



写真左上:ルセイローク・ヒトミ・サンキム中学校の校門。生徒と多くの村人が出迎えてくれました。式典を手伝う女性たちは正装して。写真下:男子生徒による民族舞踊。太鼓などの楽器に加えユーモラスな動きで楽しい踊り。写真右上:女子生徒によるアプサラダンス。古くは神に捧げられ王宮の祭りの踊り。ゆっくりとした動きと手の角度、目線が美しい。

(前頁より)
今回一番の目的である大宮シティロータリークラブ創立10周年記念事業であるタイ・サンキム小学校建設の開校式への参加、そして井戸掘りの視察と水質検査を2日目と3日目の2日間やりました。途中の道ですれ違った人々、村に入って出会った人々、大人も子供も、初めて私たちと会って、みんな表情が固く不安そうな顔をしていました。しかしこちらから手を振って挨拶するとホッとするように急に白い歯を出して笑顔になるのが印象的で、決して裕福ではない心が温かく感じられ何か懐かしささえ感じました。
2日目のタイ・サンキム小学校開校式では盛大な歓迎を受けて、みんなが大変よろこんでいるのを肌で感じ感激いたしました。また、3日目に国際ロータリー100周年事業で大宮シティロータリークラブが5年前に建てたバンコーン小学校を視察した際に、

学校を造るだけではなく、その後のメンテナンスの必要性和教材など勉強するのに必要なソフトの部分も重要で、これからのこの国の宝である子供たちの識字率向上など取り組むべき課題はいろいろあるように感じられました。
村の人々の生活も高床式住居とイヌなど家畜と共同生活する中で水の問題と衛生面など大丈夫なのかと心配しましたが、ニュースで取り上げられたヒ素問題に関しても、井戸の水の検査結果は良好で安心いたしました。まだ、カンボジアという国の一部しか見ておりませんが、最終日に行ったアンコールワット・アンコールトムの遺跡などの歴史を作ってきた国の人々と接して、同じ地球・同じアジアに住む人間としてカンボジアを身近に感じるようになり、また歯科ボランティア活動にも触れることができよい体験が出来ました。

ルセイローク・ヒトミ・サンキム中学校

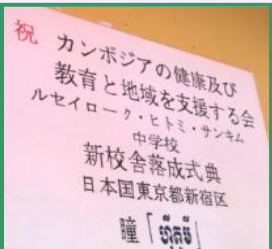
2008年11月22日、さいたま市在住の内村さんをご寄附くださったルセイローク・ヒトミ・サンキム中学校(5教室)の開校式が行われました。
そこは、シェムリアップ市内から東に約60km、舗装道路を折れ、さらに赤土の道を10km近く入ったチクレン郡ルセイローク地区、人口約1万2千人のルセイローク村。
これまでこの地域には、中学校は無く、小学校を終了しても卒業生は遠く離れたサムパナピアップ中学校へ通わなければならず、多くの生徒は進学をあきらめざるを得ませんでした。



開校式では、生徒たちが民族舞踊や伝統のアプサラダンスで歓迎してくれ、参加者一同、感激しました。
校名の「ヒトミ」の由来は、内村様のお亡くなりになったお嬢様のお名前です。
内村さんのご挨拶には、子供たちへ優しく熱いメッセージがこめられていて、生徒、村民たちは真剣に耳を傾けていました。

カンボジアの未来へ

内村さんがルセイローク・ヒトミ・サンキム中学校の子ども達へメッセージをくださいました。
内村美津子
チェムリアップスオ(こんにちは)
3年前、娘、瞳が29歳で亡くなり、私は大変悲しい思いをしました。瞳が生きた証として、私は何か出来ないかと思っておりました。そこでSCHECを知り、学校を寄附することに致しました。
皆さんの国が大変な困難にあってた時、私は新聞やテレビを見て、とても心を痛めておりました。
今回、このような形で、みなさんのお役に立つことが出来、また、ヒトミの名前が中学校の名前として呼ばれることをとても嬉しく思っています。
どうか、皆さん、瞳の分まで生きて、楽しく勉強し、お友達をたくさんつくり、この学校で良い思い出をたくさんつくり、社会に出て活躍してください。
私はいつも日本から皆さんの幸せを願っています。そしていつかまた皆さんに会いにカンボジア来たいと思います。



よりよい口腔衛生のために一歩ずつ 歯科診療活動報告

理事長 河野 篤

2008年も歯科医師43名、歯科衛生士5名、歯科技工士1名、ボランティア8名計57名の歯科診療チームが結成され、11月21~24日の4日間、現地で診療活動を行いました。実質7回目の活動になります。
診療した患者さんの数は予想をはるかに超え1229名とこれまでで最高でした。当初準備した器具・薬剤などが大きく不足し、現地で一緒に活動をしてくださるTAN先生が街中を走って集めてくれました。
現地の歯科医師、歯科技工士との密接な交流も本会の特色と言えましょう。
また我々の歯科診療資格についてはカンボジアの厚生省・州の衛生部から口頭による認可を受けていましたが、本年からSCHECの歯科診療行為について州知事から正式に保証を頂き、活動期間中は有資格と認められました。正式な資格保有を認められて活動している歯科医療関係のNPOは、教育関係を除きカンボジア初と思われます。このことは歯科診療上の問題が解決されたもので、会の一層の発展に大きく寄与すると思います。
今回も本会が最初に設立したバンテアスレイ・サンキム小学校の150名と



2007年に大分の梶原県議と後援会の方が設立されたコクトロクルー・サンキム中学校230名の検診に加え、歯科衛生士さんによる口腔衛生指導を行いました。特に今回から小学校での虫歯予防に力を入れたいと思い、初めてフッ素塗布を行い予防歯科の実践に大きく一歩前進しました。今後も予防に力点を置き、毎年継続することとします。
また歯科技工士の邑田先生は2007年に引き続き、夏と今回の年2回、現地の歯科技工士さんを対象にSCHECの名称で研修を行っています。毎回歯科医師が20名、歯科技工士が10名ほど受講し、皆さん、この研修を楽しみにしています。
毎度感じていることですが、ボランティアでご参加くださる皆さんには頭がさがります。診療器具の準備、消毒、押し寄せる患者さんの案内、薬剤の説明、そして折り紙などの日本文化の紹介など、一体感を持って行ってください。いまやボランティアの皆さんの存在なくしては、歯科診療は成り立ちません。心から感謝しています。
歯科診療は、今年も行います。皆さまのご協力をお願いします。

初めての海外での ボランティア活動

歯科医師 熊代 祐子

2008年、学生の頃からの念願だったSCHECのカンボジアでのボランティア活動に、やっと参加することができました。カンボジアには、1年半前に一人旅で訪れていたのですが、今回は旅行客としてではなく、歯科医師として参加し、観血的処置を伴う抜歯などの診療の為に行くので、感染の危険性があるということに対し少し不安がありました。
しかし、現地へ行ってみると、そんな不安はすぐ払拭されました。診療用にディスポーサブルのキャップ・ガウン・アイシールド付きのマスク・グローブが用意され、グローブは2枚重ねにしていました。そして、初参加者でも問題ないよう班分けされ、各班に班長が一人いて、何か困ったことがあってもすぐ対応できるようになっていました。診療中の患者さんとの意思疎通は、現地通訳の方の協力で問題なくスムーズでした。

また、様々な歯科大学卒の人が集まっているので、そういう点でも、勉強になり、学ぶことが数多くありました。
カンボジアは、まだまだ医療設備、衛生設備が整っていない発展途上国のため、貧しい人たちは病気になっても病院に行けず、歯が痛くても歯科医院に行けないという現状を目の当たりにし、今回、自分が参加したことによって、そのような人たちの手助けに少しでもなれていたら幸いです。
この貴重な経験を今後に生かしていきたいです。
さらに今回の活動で、友達がたくさんでき、帰国した今でも連絡を取り合い、時々集まって交友を深めています。
そういった人との出会いも、SCHECの魅力の一つだと思います。
次回も是非参加したいと思います。

カンボジアの歯科 ボランティアに参加して…

歯科医師 星谷美吏

私がSCHECの活動を知ったのは、勤務先の先輩の先生が以前参加した話を聞いたからでした。元々、カンボジアという土地とボランティアというものに興味をもっていた私はすぐに参加したいと強く思いました。
念願のカンボジアに到着した時はとても興奮しました。そしていざ木陰の下での青空診療がはじまりました。最低限の器具、治療台の代わりは教室で使われている椅子と机、順番を待つ患者さんの長い列。正直不安でいっぱいでしたが、はじまってみるとあっという間に時間は過ぎていきました。覚えてたのクメール語と通訳さんの助けを借り、なんとかコミュニケーションをとり、治療をしていきました。治療は主に抜歯とC2程度の虫歯はグラスアイオノマー充填というものでしたが、根管治療という選択肢をつくれない現状にはやるせない気持ちになりました。



治療をしていて思ったことが二つあります。一つは、限られた器具の中で治療する事の難しさ、逆にいうと普段自分がいかに恵まれた環境で治療をしているかです。二つ目はカンボジアの子ども達が我慢強いということです。なかには号泣する子どももいましたが、ほとんどは涙をこらえて必死に耐えている姿を見て、カンボジア人の芯の強さを感じました。
この活動に参加して、日本では気づかないことが沢山ある事を知り、又、多くの先生方にご指導戴けたことが大変勉強になり、とても濃い時間を過ごすことができました。そして、この活動は、色々な人たちに支えられてはじめて行えるものだに参加してみてわかりました。決して1人で出来ることではないので時間がゆるす限り、また参加したいです。

